

太平記卷廿二曰人々自害シケル其中ニ彼塚伊加貝守一人ハ大手ノ二ノ城
 戸残りナク押開ラズ一人ゾ立タリ云々追懸タル敵二百余騎ニ六里ノ道ヲ
 被送テ其夜ノ夜半計ニ今張ノ浦ニ着テ自此舟ニ乗テ隱岐島へ落
 ハヤト志シ船ヤルト見ルニ敵ノ乗捨テ水主計残ル船數多アリ是ヨ我物ヨ
 ト悦テ曾着ナカラ浪ノ上五町分リテ遊キテ船ニ岸破ト飛乗ル水主揮取オ
 トロラ是ハ官方ノ落人彼塚ト云者ゾ急ギ此船ヲ出シテ我ヲ隱岐島へ送ト
 テ二十余人ノリ五ヶ所定ラ安ミト引攀平五尋アリ船ヲ輕ミト押立テ屋
 形ノ内ニ高枕シテ艤艤カキテゾ卧タリ先水主梶取モ是ヲ見テテ後シテ
 夫ノ態ニアラント恐怖ノ則順風ニ帆ヲ掛テ隱岐島へ送テ後暇ヲ請テ帰
 元昔モ今モ勇士多シトイハル事ヲ聞ストテ條塚ヲ毀ヌ者ヲ無クシ

按日本外史曰賊不敢追蹏至今治浦見賊空船獨有舟人彼塚游而
 達之跳入船自名曰送吾於隱岐手拔錨樹桅登船屋軒睡舟人畏
 怖送至隱岐以終焉ト云太平記ノ所謂隱岐島ハ即今治ノ沖島
 云々ト外史ニ隱岐國ト為ルものハ誤ト云

○ 弓削神社

弓削島ノ海濱ニ在リ僧道鏡ト祭依ト云因テ俗ニ法王宮ト名ク所ノ
 風習ニ村民伊勢ニ參宮ス者ハ其妻必此社ニ通夜シテ夫ノ恙
 無ク歸ルト云

續日本紀云宝龜三年四月丁巳下野國言造藥師寺別當道鏡死道鏡
 俗姓弓削連河内人也云々以道鏡為太政大臣禪師居頃之崇以法王載以

鸞輿衣服飲食一擬供仰しつゝ孝謙帝の寵愛は誇り僭て法王
 と稱す至是是より遂に天位を昇んと謀り我が祖和氣清麻呂卿を
 勅使して此事を宇佐八幡宮に告せ玉ひて大神殊の外怒を玉ひて我國
 家昔々君臣の分定より臣として皇位を昇り例は更なる所なり天日嗣ハ
 必天皇の子孫とまよふ氣無道人ハ早く掃除せしむと託宣有り由と仰
 奏しつれば道鏡怒て清九卿と大隅國流しつれば卿の忠言は道鏡の望も
 絶て天日嗣地は墮す万代照く日月と光と争ひ玉を花年と経る
 御世も改りて光仁天皇御即位後清九卿と召すを以て官位を復せ玉
 ひぬ其時道鏡ハ死刑にも處せしむと先帝の寵有り奉るれば造素師
 寺別當と授て下野國に配流せしぬ死後には庶人葬しつゝ官位ハ召故也

此事ハ日本后紀續日本紀等ハ具載し

按此社ハおほくはらやあるも知るも必道鏡を祭るははら道鏡ハ
 上より如き大逆無道の奸僧に決て神より祀せしむるを鏡の
 姓より削りしむる也此島より削りぬるに誤り道鏡を思ふも
 一法王宮と云名を人付て祭るも一先帝清九卿の勲功と
 賞玉ひて嘉永四年三月廿五日正位護王大明神と名神階神号と賜り時の
 宣命も此時汝よりせむ下より上と後より下と歎くはらゆると詔
 給り其時我等如き卑賤身も此卿の裔なりと勅命有て法橋と
 賜りも程の御事也ハ此社ハ祭は正しく道鏡も今も朝廷
 より社殿を毀せぬ祀も絶たぬも是れは是必の奸僧にたて



石水
イカナ
ナラハラ



ウカナハ
大ノキ
総社川

外は祭神の在る一宮は法王宮を額、遠く取除て三宮別社
との一宮はついでに御宇天皇の御宇に現神六八洲國所須を
了身の神を在る天皇の御宇に御宇を御宇の御宇の
もして諸事ありて御宇

○總社川

今治城一町より南に流る川より越智郡第一の川され大川と云ふ此川
年魚多し源ハ之方嶽より流り竜岡と流り長谷より出純川より流り
一より大川より流り昔ハ今治城西に流り浅川より流り出ありの時
やよりハ堤切り城中に溢る河上兵作より川と決りて直に城南へ
落りて洪水の患あり今治夜話に見ゆ

此川を總社川と名けりハ古國府に總社とて建て國司神拜の所
と定りて此川邊に總社の在りて總社川と名付りて
民部帳に總社田ありて知りて玉井春枝より

按和訓栞云或曰古者國府必建總社有事于國內官社則國司
率僚屬先修典祀於此其儀如京師神祇官と見ゆ又玉多し
昔國に國司を置給へり時其始て入府時ハ國守の神拜
とて其國を諸社と盡く巡拜し又然らぬ時にも巡拜す式と
し其社を一社と總祀て總社と稱せり新に社を建り多し
中ハ其國府の地を一宮社と合齋へり有る故に只に總社と
式内を某神社と社と總社と稱すも多しと聞ゆ

高尾光智云云嵐村有伊加奈志神社一名總社明神と云り此社并
嵐の山上よきとて此川に程近き所と云ふ實に古の總社なるなり
又一説は鳥生橋畔有小祠号惣社明神と今治夜話に見ゆ

○別宮大山積大明神

別宮村に在り和銅五年壬子五月廿五日越智玉澄三島明神を越智郡日
吉郷に勧請す其後天正元年来島三郎九郎通總再建す云

豫陽盛衰記云三島供僧廿四坊内中坊兼藏坊通藏坊宝藏坊圓
光坊南光坊西光坊八坊ヲ分テ別宮大明神供僧トシ坊舎建ト云今斷
絶々々南光坊の二寺の殘り是四國順拜三島明神の前札所也
○巖島大明神

今治城下の市々々々在り神主佐伯某故有て筑前国宗像守
勧請せし社也其地ハ今三九村越某の邸中ニ在り
藤堂彦築城の時今の處に移りまぬをり云

○藏敷八幡宮

藏敷村に在り今治一藩産玉の神なり八月廿五日を祭日とす或云
河野の祖神を祀り是亦大瀆八幡の類なり別當正福寺
舊地ハ城中井上某の邸中ニ在り

○鳴部社

藏敷村樹下と云ふ所なり其處ハ豫陽盛衰記ハ河野の祖
越智益躬と云人の靈と云ふ云

按豫陽盛衰記は推古天皇御宇棘鞆國をも鉄人く云者八千の軍兵と率て九州と攻靡て京よ攻上んと寸其時越智益躬播磨國蝸坂と云所を大将鉄人と擊取功よすて府中樹下埋葬し鴨部大明神の神号と賜ふ其傍よ一寺を建立して東禪寺殿と号し益躬像よ比して薬師と安置せし由と云然とも國史よ鉄人の事あり疑ふ也

播磨國風土記曰曹岡者伊與都比古與宇知賀之牟豊富命相闘之時曹隨此岡故曰曹岡と云若此の事誤傳也

○ 姫坂神社

延喜式は越智郡姫坂神社名神大と云其社考よ所祭市村島

姫命也といふ御社日吉村北の山邊よまを國史よ叙位の事見す然れども延喜式は名神大といふを思ふは古ハ大社を在ると世の降はまよ今ハさやる御社とありて云ふはいと畏し或云此社舊ハ四町と云て南の田中よ在るとその山より今の所は移りてと

按三代實錄曰仁壽元年正月庚子詔天下諸神不論有位無位叙正六位上といふハ無位の神等も正六位上を在る也

○ 近見山

今治城の西北石井村は在るこゝも高き山也特之と越智野間の二郡よ涉るを河野將重見氏の城蹟を山上よ三島明神と祭りて明神山と云

豫陽盛衰記曰重見因幡守通親トテ明神山城主河野十八將隨
 一ニテ先年京都戰ニ手強ク働キ三好筑前守光長兄弟ニ腹切セタリ
 其嫡男得能志摩守通實次男童見掃部頭通昭トテ家叔男相續
 シテ河野肱股ノ一族也其嫡子因幡守通種次男近江守通遠三男美
 濃守通次也然ニ通種出奔以後二男通遠家名ヲ相續シ彼乱ノ砌通
 直ノ為ニ討レタリ通宣通直父子和平後三男通次ヲ以家名ヲ立其嫡
 重見孫七郎家ヲ相續シ明神山城ニ居住メ天正十三年小早川隆景ニ
 攻落セラテ命ヲ殞セリ其二男庄九郎三男庄九郎ハ夫ヨリ沉淪シテ水ノ
 民間ニ落ケリ

二名集曰享祿三年三月府中石井山城主重見因幡守通村者湯

○ 月館達命事有仍村上石衛門通康蒙館命率二百余騎進發大戰
 城兵敗逃ヲ籠テ石井山城通康進圍彼城重見振勇猛雖防戰寄
 手日ニ増執カ城兵夜ニ逃失之間終氣盡力勞采収遁去防州

○ 僧都水

○ 日吉村の山陰ニ在リ石の井筒有テその中ニ靈泉湧出テ夏冬涸
 事有 尤奈ト意ムル者一石の四面ニ雲形ヲ見テ誰ノ作リト
 此の石日光ニ映シテ五彩ヲ現スルヲ換村ニ白井水ニ異ナル
 ○ 海禪寺

日吉村ニ在リ禪宗本尊釋迦如來天竺長老ト中興開基ト守舊ハ
 海榮寺ト云フト後ニ海禪寺ト改メ藤堂侯ト一山寄附有

豫陽盛衰記曰重見因幡守通親トテ明神山城主河野十八將隨
 一ニテ先年京都戰ニ手強ク働キ三好筑前守光長兄弟ニ腹切セタリ
 其嫡男得能志摩守通實次男童見掃部頭通昭トテ家叔男相續
 シテ河野一族也其嫡子因幡守通種次男近江守通遠三男美
 濃守通次也然レニ通種出奔以後二男通遠家名相續レ彼乱ノ砌通
 直ノ為ニ討レタリ通宣通直父子和平後三男通次ヲ以家名ヲ立其嫡
 重見孫七郎家ヲ相續レ明神山城ニ居住メ天正十三年小早川隆景ニ
 攻メ洛サレテ命ヲ殞セリ其二男庄九郎三男庄九郎ハ夫ヨリ沉淪シテ水ノ
 民間ニサ洛ケリ

二名集曰享祿三年三月府中石井山城主重見因幡守通村者湯

月館達命事有仍村上石衛門通康家館命率二百余騎進發大戦
 城兵敗逃籠于石井山城通康進圍彼城重見振勇猛雖防戰寄
 手目ニ増勢城兵夜ニ逃失之間終氣盡力勞采收道去防州
 僧都水

日吉村の山陰ニ在テ石の井筒有テその中ニ靈泉湧出テ夏冬涸
 事有一尤奈ク意ニ去リ石の四面ニ雲形ノ壁誰ノ作テテ守
 此の石日光ニ映シテ五彩ヲ現スル楠村ヲ白井水ニ異スル

○海禪寺
 日吉村ニ在リ禪宗本尊釋迦如來天竺長老ト中興開基ト守桂曰ハ
 海榮寺ト云レト後ニ海禪寺ト改メ藤堂彦右衛門一山寄附杖有

寺内は名木の塩竈櫻あり多し貞享四年二月廿八日日本智院殿花
見入せむし多時すむるよし多

ふみの海は遠き山ちよりのすくも花のいほ

心光院殿題海禅寺詩云

林苑松樹裏山遥白雲閑臨眺堪觀世風塵總不關

○鯨山

馬越村の田中は茂る小山是る寺あり安養寺と号し往古此辺
まで入江まで潮の来り時馬を越るよりて馬越村をきき入江の中
に鯨鯢の跳ぶと因て鯨山と名付る一世人と掘り今日
販売多く出と云

○大須伎神社

延喜式は越智郡大須伎神社とあり所詳も人或云く彦名命也
鏡も七神躰一寸裏は大須伎大明神の二字を彫りて云され
その後世の物も一御社の高橋村の田中より出せり

七社詣記の中

菅原長世

おんてはあつものつのはげはたすきとまらけとあま

○伊豫熊權現社

彌能小六郎行恒と云く紀伊國熊野に參詣せし時夢想有て伊豆國
に勸請して彌能權現と崇む今高橋村の山より示は是也此行
恒ハ弥能と氏とせり録倉將軍實朝公の時伊豫御家人三十二人の内

弥越三郎頼行（イサキ）之人ハ此處（山形）由縁場盛衰記（見）也其後山崩レ
 社（埋）之跡（を）知（り）の事（あり）一我實相院（殿）寛文九年巳酉二月廿日
 夜の夢（に）白衣神女（來）告（白）我伊豫熊權現也時其至矢道正復矣又曰
 若見古鏡即五矢（と）覺（て）不思議の事（に）思（は）せむ伊豫熊の山（を）探（り）
 出中（より）古鏡二面（あり）背面（は）及靈劍靈石一箇（と）獲（も）石面（は）經文（と）用
 て未（だ）天承二年壬子ハ誌（し）天承ハ崇徳天皇の年号（と）して寛文九
 年迄九百三十八年（まで）仍村越直禧（命）一社（と）再建（を）命（じ）
 此事將軍家（より）家綱公御堂（より）白銀若干（と）獻納（し）也
 侍臣關重慈（命）一東都（より）疾馳（し）廟前（に）捧給（し）社傳（し）
 見（る）

按和漢三才圖會（に）伊豫熊野權現鳥羽院朝有神託里民勸請
 之（を）見（る）彌熊小六郎行恒の事（と）也
 寶物（は）狩野探幽齋守信手痛（に）因（り）て祈（り）為奉納（せ）也自誌（に）画軸有
 全唐紙（に）松（り）日出（る）鳥の圖（あり）其外常信安信等（は）皆奉納（し）也

和靈社

延享三年六月宇和島（より）勸請（し）法界寺村長淳元某の庭中
 在（り）諸人の信仰（より）て寛政年中山上（に）一社（と）建立（し）て移
 中（に）老若男女諸人（は）昼夜（も）守神徳盛（り）也
 大野神社
 延喜式（に）越智郡大野神社（と）所祭（す）廿四社考（に）大己貴命（也）

大野神社

壽永年間隨身拍犬圖

木質櫻の如く臺ハ樟也



其裏書模寫

壽永二年

八月廿日

大野神社神主

本宮宗弘謹寫

御社ハ大野村の山邊にありて其の神田中ニ在りて其の傳也
周々田中大明神

○玉河

鉦川山より出流し、此末長谷村より出、總社川に落す。
詳書類従九卷神鳳鈔云、伊豫國王河御厨臨時祭料土御門
前祭主御領より、傍に丹生川と云、此鉦川昔丹生川
と書くるる也。

○鹿島木林城墟

鉦川村に在り、河野氏の族越智駿河守と云人の城跡なり、天正年中
小早川隆景の爲に落城せり。

豫陽盛衰記曰、鹿島木林城主越智駿河守已ニ自害セント是時舎弟右
衛門尉ヲ呼テ汝ハ何トシテ落行ヘレ命ヲ全メ時節ヲ待ヘレ如何ナ

六累代河野此度ニ絶果シテ死ニハ安シ門間が嫡子太郎モ未ク幼稚ノ

者ナレ心ハ同事也汝が爲ニ姪トシテ才覺メ連逃トシテ右衛門尉之腹

ニテ扱ニ此輪ニ臨ニテ危様イヤレキ一族比自潔ク討死ス中ニ獨生殘僅

ノ齡ヲ活シテ今ニテナキ耻ヲカケテハ仰モ不覺跡先ラ云ニ無益ク承

テ黄泉ノ迷也トテ鎧ノ高紐解ケハ駿河守權ト白眼ニテ汝ハ思外ル愚

人カナ死テ計能ナラ我モ死ス身ノ共ニトコソムヘレ不復ニ命ヲ惜ムト云ニ

アズ家ノ為ヲ思フ故ナリ此大切ク他人ニ頼ミナラズ猶モ道理ヲ辨ス至

道ノ當ゾトククト云ケルハ此上ハ是非ニ及ス今死ス舎見ヲ見捨テ泣ク

裏門ヨリ岨道ヲ傳テ或漢合迄落延云々を見と

○桂山法藏寺

桂村に在り一山櫻樹を多く植是く花の頃ハ詣る人少く寸本尊釋
迦如来立像長五尺寸俗に相傳赤梅檀とて天竺毘首羯摩手作也

之也

按赤梅檀ハ即沉香木と云諺所謂梅檀ハ二葉より殼香くと云其の
是より此像有木理固沉香の類と云ハ疑わらば京都嵯峨音
竜寺の釋迦と誤混り説るべし今治夜話に有傳可秘と云
又伊豫俚諺集云実ハ鬼子母神の告よとて大濱佛師唐
桑とて造之

○重茂城墟

和木村に在り岡部十郎と云人の城蹟を也

豫陽盛衰記云此度高外木落城以後隆景ヨリ和議ノ事ヲ云送之ハ
中川計ハ承引シテ城ヲ明退新ニ秀吉公へ出テ奉公セシ也其餘ハ曾テ諾
命ヲ限ノ返答シテハ力不及夫々手分シテ勢ヲ差向レ其内岡部十
郎ハ其場ニ臨テ城ヲ開去トシテ

○幸門城墟

龍岡山に在り豫陽盛衰記に竜岡幸門城主正岡右近大夫ヲ始
云と見ル也

○檜原山

越智郡第一の高山也東ハ鈍川に屬西ハ竜岡跨嶺上ハ藏王權現と
祀牛馬と護り守神也とて農民信仰して詩人多し鈍川千足山

和木村に在り重茂城墟

佛^ハ時^ニ寺^ヲ登山^シの岨^ニ道^ノ櫻^ノの大樹^{多ク}別當^{光林寺}昔^{弘範上人}此
山^ニ祈^雨の時^ニ奇瑞^{有リ}由^{人口}臆^{多ク}也

春^枝云^{式内伊勢國度會郡}祭^{良波良神社}神^名秘^書曰^又
伊^豫國^ニ在^リ所^祭伊^邪那^岐神^也と^云也

今^治夜^話曰^{一年大旱}赫^日焦^肌青^田為^皇令^{弘範}祈^雨於^南羅^漢
羅^藏王^權現^築壇^一七^日當^其六^日所^執之^獨鉆^神水^滴矣^忽辭^壇歡

喜^言請^雨法^中探^無龍^到山^城國^有一^龍麾^之來^于此^{大願}成^就矣^因
欲^修破^壇法^官士^宜早^下山^勿怠^恐不^得涉^後川^矣諸^吏隨^言而

下^山時^日停^午赫^然唯^見東^方遙^天片^雲耳^衆或^疑或^哢及^至後
川^疾風^拔樹^暴雨^驟至^衆大^驚嘆^賞

○光林寺

畑^寺村^ニ在^リ真^言宗^領主^代の^祈禱^處也

豫^陽盛^衰記^曰來^島數^代家^老原^四郎^兵衛^ト云^者忠^ハ不^顧私^勇不^惜
命^トイ^ハ二^トモ^ニ全^セリ^男子^二人^有シ^力跋^テ其^後大^島ニ^居年^ヲ經^テ尚

家^ノ縁^ニテ^男女^二人^有男^子ハ^出家^シテ^俊良^光範^上人^ト云^リ越^智郡
光^林寺^ニ住^シ德^義アル^僧由^其頃^沙汰^セリ^今治^夜話^作弘^範

○作禮山仙遊寺

別^所村^山上^ニ在^リ真^言宗^四國^順拜^五拾^七番^札所^也本^尊千^手觀
音^何人^の作^ルもの^知ず^縁起^ハ龍^女一^刀三^禮作^ルもの^信ずる^者
足^ハ然^也も^完基^尤古^ノ本^堂度^ニ災^ハ今^の存^セる^者

我實相院殿の建立者勢五郎所より云此山上は天智天皇陵と
 云者りとも固附會の妄説なり此寺は足利家の寄附状有共外河
 野家数代の文書并正岡左衛門大夫得能下總守寺寄附状多し
 仙遊寺住持職之事中合込也
 右任先親なるも退領きて全寺勢五郎如件

三好家系圖

○犬塚池

作禮山の麓鹿は在り堤下は犬塚有因て名く云此池谷山の水を湛
 て夏冬潤ふ事有越智郡の田面より此の惣社川と第一寺
 此池水亞之と云相傳昔義大は仙遊寺と八幡山榮福寺と兩
 寺は愛せり仙遊寺の鐘鳴時佐礼は来り榮福寺の鐘鳴時ハ
 幡山は登ふ或時兩寺の鐘一時は鳴るは南北は狂走り遂は此堤下
 斃て死より仍て此処は塚を築く犬塚是るなり狸諺集は榮
 福寺と三嶋別宮は作は

○石清水八幡宮

八幡村の山上は主せり此山の形勢惣社川の南は特きて山城の男山

甚相似し因て此山とも八幡山と名く何頃の勸請なるの事
江戸名所圖會鈴鹿八幡宮社記云清和天皇貞觀年間八幡宮宇佐宮
より山城国石清水鎮座在時六十余州国毎に總社八幡宮と擇定給
へり云別當梁福寺真言宗四国順拜五十八番札處なる事

○伊加奈志神社

延喜式に越智郡伊加奈志神社とあり奈所詳なり或云五行
神也御社八四村の内五十嵐村の山上にませき
神主高尾光賀曰此社昔より總社明神と云傳はると
按古國府に必總社なり國司神拜の所とも總社多し一宮に
合祀するも當國の一宮海上と隔るは此社に合祀するも

○淨寂寺

四村の内松尾と之所の山際在り禪宗として昔ハ能寂寺と云ふと後
は今名は改り足利家の文書河野氏数代の寄附狀寺今猶存せ
る觀應貞治延文正平等の年号見ゆ中は制札の文あり

禁制

能寂寺

右於當寺甲し人不可致乱妨狼藉若北月此上首輩者可被
罪科之狀如件

永徳二年

十月十六日

右馬頭

本國院殿每此寺之立寄せ玉ひ隨轉和尚と贈答せり給ひ
詩數首あり中よ

重邊津寂禪林和隨轉道人所呈一律

膺月迎春早好風及野棠開清心易足山遠眼難量又手
吟復向揮毫數行禪心磨不磷一喝貫天霜

采女今題

今治夜話云享保十七年三月十七日隨轉和尚行年七十九歲而入定家
上儲竹筒故所持之梵鈴微音希徹數十日群參諸人所聞之也

遺偈并歌

大千世界中一箇一團鉄慈釋二尊間都不預生滅

生れハ死ス日まて此命をしかひぬる後のまはれぬ

○鷹鳥取城壘

作礼山の南新谷村の山上に在る礎石垣等今猶存也

豫陽盛衰記曰古谷鷹鳥取山城主正岡紀伊守入道八近來河野命ニ
違ヒ己ニ軍ニ及フ事度也也見ル新谷村吉祥寺の後の峰に小祠有

正岡紀州の靈と祀る云

○多伎神社

延喜式に越智郡多伎神社名神大とあり所祭詳くは或云素戔
鳴命也又一説は大己貴命女多伎比賣也と云り御社古谷村の山の
麓に立せを俗に瀧宮と云

多岐伎神社



多岐伎神社

多岐伎神社

高くまきつゝさきさきとて名のかたはくひりひらりて其
 はらぬの名きふ川上出巖とて名のかたは中より高き二丈なり横ハ
 二丈なりとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 ちりり社司のまやあむんとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 名のかたは名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 とのなる雲のひらひらとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 事なむとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 せいとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 くひらひらとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 の枝はすけりて本葉のなむとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ

高くまきつゝさきさきとて名のかたはくひりひらりて其
 はらぬの名きふ川上出巖とて名のかたは中より高き二丈なり横ハ
 二丈なりとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 ちりり社司のまやあむんとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 名のかたは名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 とのなる雲のひらひらとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 事なむとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 せいとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 くひらひらとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 の枝はすけりて本葉のなむとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ

○塚元

朝倉中村野の瀬とて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 高二丈長七間とて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 大石とて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ
 陵のなむとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふとて名きふ

と云ふは、昔貴人と葬り、墓の大小凡四五十人あり、
猶此塚穴の考、久系郡の播磨塚の処より

○靈山城壘

宮崎村に在り、中川城守親武、會弟常陸公豊住の人の城跡あり、今
治圓光寺ハ中川の善授寺とて親武の画像あり

豫陽盛衰記曰、船テ人数ヲ繰出シテ不意ヲ討ハ中川山城守也トテ早、
シテ櫻井ノ濱へ上リ意趣ヲ認メ一通ヲ送り、否ヤ彼城ニ押寄リ此城守

親武ハ河野十八将ノ一人ニシテ越智郡朝倉宮崎靈山城主也此頃野
有ト知ナカラ今カク寄ヘキト恩モ寄ラステ城中上ヲ下ト返シケル

宮崎靈山城主中川常陸公等ノ面、嫡流自立キテ恨テ別儀ヲ至終ニ催

促ニ應セズ今度高外木落城以後隆景ヨリ和議ケラ云送りカハ中川計ハ承
引シテ城ヲ明退キ新ニ秀吉公へ出テ奉公セシ也

○樟本神社

延喜式ニ越智郡樟本神社ト云、所祭素戔嗚命也ト云、御社ハ
町村の田中ニ立セケル

三代實録曰、貞觀十七年乙未夏四月九日丁巳、授伊豫國從五位下、
本神從五位上今本作楠木誤也

類聚國史神祇部十六神位四 曰、貞觀十七年四月五日丁巳、授伊豫國從五位
下、楠本神從五位上

大成云、今の神名帳ニ樟トミキト訓、六非ヲクスト訓、

三代實錄は楠とありてあり

夫野玄道曰神名帳古本はハクスと点とせり三代實録は古本ハ
章本と書ゆ樟新撰字鏡は久須乃木と見え和名抄楠久須
乃木櫟樟日本紀讀上全とありて久須とむすゆ明と

○矢矧八幡宮

朝倉中村に在り越智氏の祖天狹貫の靈と祭ゆ因て朝倉郷の宗
廟と稱せり

伊豫不動大系圖云朝倉宗廟ハ人皇七代孝靈天皇第三皇子彦
狹島王三代小千天狹貫ノ廟也

按此社も大濱八幡宮の類なり

○野間郡 乃萬

國造本紀曰怒麻國造者神功皇后御代阿岐國造同祖飽遠王
命三世孫若彌尾命定賜國造

舊事紀五卷曰物部金連公野間連借馬連等祖目大連之子

伊豫風土記曰野間郡熊野峯所名熊野者昔熊野止云船設此至

今石成在因謂熊野木也

按今世野間郡は熊野と云ふ所の山に風土記殘篇に所
怪き事多し悉く信ぜし

○和名抄郷名

宅万郷
神戸郷

英多郷

大井郷

賞多郷

昔此五郷よりと後世二十九村に分ちり

河方村

千石十九余

延喜村

百石余

神宮村

百石余

野間村

百石余

紺原村

百石余

大井濱村

百石余

宅万村

百石余

九王村

百石余

樋口村

百石余

杉田村

百石余

高部村

百石余

宮崎村

百石余

波方村

千石十余

宮腰村

百石余

山内村

百石余

殿村

百石余

星浦村

百石余

別府村

百石余

佐方村

百石余

種子村

百石余

池原村

百石余

松尾村

百石余

河内村

百石余

中川村

百石余

高田村

百石余

長坂村

百石余

濱村

百石余

西山村

百石余

來島

千石六余

新町村

百石余

總高壹萬四千九百八拾九石二斗二升五合

野間神社

延喜式に野間郡野間神社名神大とありありハサ四社考よ天
照坐大神和靈神也と云々御社ハ神宮村に立サる俗に牛頭天王
といハ誤と云々大成云天皇神といハは某天皇と祭奉と云々

續日本紀高野卷曰天平神護二年夏四月甲辰云野間郡野間
神兵授從五位下神戸各二烟新抄格勅符野間神六戸伊与國ハ

續日本後紀曰承和四年八月戊戌云伊豫國後五位下野間神并預

名神

三代實錄曰貞觀三年五月廿日甲午云、授伊豫國從五位下野間神從四位下、

同八年閏三月七日壬子伊豫國從四位上野間天皇神云、先授正四位下、

同十二年八月戊申授伊豫國正四位下野間神正四位上、

同元慶五年五月廿八日壬寅授伊豫國正四位上野間天皇神從三位、

長寬勘文天慶三年二月丁酉伊豫國野間神正二位去承平五年依海賊、

按天皇上とく俗よ牛頭天王也とく、これ牛頭

天王といふ安部晴明か著せる金鳥玉兔集之中天竺摩訶陀

國云、改号牛頭天王頭戴黃牛面兩角尖猶如夜叉厥勢長大由
膳那也厥相顔異他故更固有后宮四姓皆悲嘆云、つと天
竺摩訶陀國人也蘇蘇民將來と云羽の船と借て竜王城に至り頗梨
糸女と婿て八將神と生りす怪怪き神もとくも我日本の
神の所名のかつつハらるる之れの証事と名或ハ素夷鳴命と
牛頭天王也といふ殊よそれる

○圓明寺

阿方村あり在り真言宗本尊不動行基作りと云四國順拜五十番

札所あり

○延喜觀音

延喜村乘禪寺（在り）靈佛（と）祈（は）奇驗（あり）老君男女（詣り）
人多（し）

俚諺集云松山少將定直公初今治城（に在り）時（と）此觀音（と）信（じ）おひ

一は松山の養君（と）成玉（と）後近村石寺の田中（に）一寺（と）建（ま）て此觀

音（と）安置（し）むり然（る）延喜村（に）遷（る）靈臺（を）度（る）一は遷（る）

本（の）處（に）返（す）給（い）其時（の）堂宇（今）の本堂（是）なり

按玉銚百首（は）釋迦孔子（も）神（も）一（も）ば（な）く（り）佛（も）固（り）神

る（れ）祈（ひ）驗（す）一（も）ば（な）く（り）國（の）神（と）あ（ま）外（の）

神（と）祭（ら）一（も）ば（な）く（り）我親（と）味（も）て他人（の）親（と）敬（ぶ）如（し）

○波止濱

波方村（に）在り頗廣大（なり）入海（する）東（に）久留島（有）て三面（は）山陰（あり）箱

の中の如（し）い（ふ）風波（も）障（り）有（る）事（あり）因（り）て數百（の）大船（此）湊（よ）と

風景殊（に）立（ち）波方昔（は）宮瀉（と）ソ（も）此干瀉（の）箱（の）如（し）く（り）傳（へ）

名（に）負（つ）此所（は）塩田（多）天和（の）頃（に）經（た）堂（と）め（り）云（は）樋口（の）堤（長）

六百三十九歩（は）松田川（六）百一十二歩（は）南高部村（の）境（と）經（て）河水（と）導（き）海

入塩田（の）室（を）避（き）沙苗（の）勸請（を）竜神（祠）りて毎年（三）月（八）九

日の宮（祭）礼（賑）一（は）民家（漸）く（敏）系（宗）一（は）今（は）二百餘年（の）鹽（の）

利（甚）多（し）一（は）云

○圓藏寺

波方村（に）波止濱（に）在り禪宗（黄）藤（流）一（は）和氣郡（千）秋寺（末）

波止濱



波止濱

波止濱



波止濱

波止濱

○来島
多し云海岸は倚り構へる樓閣異域の風を寫して風流化を真

波止濱の東五町と云く沖中に在る海岸より垣と築環自然
の一城廓と村上の一族来島三郎九郎通總と云く城墟を
豫陽盛衰記曰海岸ニ巖ノ要害ヲ構テ船軍ヲ第一トせん村上来嶋
因嶋が其術ニ練麻を張本と故也依去海陸共ニ嫡家ノ赴所從
ハサレハ無カリキ

又曰来島三郎九郎通總ハ晴通塔トシテ風早郡ヲ化粧田トシテ贈
ラレ二代マテ嫡家河野ノ婚トハ同家ノ能島因島モ此人ヲ指シテ今
三家ノ隨一ヲ領知モ多ク所ニ此名要害モ数多有テ勢本ニ十階セリ

是偏河野因深故ナリ

又曰天正年中豫州討手ノ大将九衛門佐隆景ニ命ス其頃ハ来島
又三郎未タ十八歳ニテ柔ラ又通總秀吉公ハ志ヲ通セシ故竊播州
姫路ニ至リ秀吉公ニ謁シ豫州征伐ノ先登ヲ承ル其後天下一統以
後又三郎任出雲守文祿元年二月朝鮮征伐ノ時船手ノ先陣シテ
討死セリ子息助兵衛後右衛門佐康親ト号ス慶長五年ニ豊後
國玖珠へ所替其子丹後守通春其子信濃守通清トテ代ニ不相
替相續スト云

○来嶋灘
此間満干の沙がくそ風を吹き波逆立渦まじりて鳴音雷の如

行為之隔絶

按扶桑略記云承平六年南海道賊船千餘艘浮於海上強取官物殺害人命是純友の事と云あるが其後又能島來島因嶋の軍兵諸國と掠奪し明國の境を侵すといふは海賊と稱す海賊の名の来久しと云へ

○怪島

別府村の海中に在り河野氏の將神野左馬允と云人の城壻と云天正年中小早川の為に亡ぬ小松守野某の家は小早川氏の感状有今度野守郡怪島城合戦に刺首五被討取に被太刀疵槍疵二ヶ所忠節神妙也弥可勅戰功者也仍而狀如件

七月十三日

陰景花押

宇野右馬之允及

○津尾崎

万葉拾穂抄歌枕秋寐覺等よ伊豫國名所と云和爾雅三才圖會比皆同仙覺抄よ野間郡と云然と云其處詳をべ

萬葉集卷三

葦邊波鶴之哭鳴而湖風寒吹良武津字能崎羽毛

按代匠記云和名抄と見るよ近江國淺井郡よ都守郷有湖風とみるよ訓よ此所の事と云然と云風早郡の海上よ津和と云島りて津和津尾音通ハ仙覺が此所の

るを思ひ語りて伊豫國ハ定らるる

○松尾瀧

松尾村の山中に在りて断崖絶壁にして寒水倒し落るる
丸右松杉生茂りて昼猶暗く滝の傍る石上は観音の
石佛を安置せり風景殊よすなり是を滝見の観音と名
近世太守定直公建立せり給ひし由俚諺集に見ゆ

愛媛面影卷二終

199
42
04

